

旅から学ぶ

株式会社エイチ・アイ・エス
取締役相談役
行方一正

「なぜ戦争が始まったのか分からない。税金を払っていたわれわれ国民が、なぜ軍から攻撃を受けなければならぬのか」

昨年7月に訪れたトルコで、シリアから逃げてきた難民の家族が口にしていた言葉だ。同じく昨年、ウクライナを訪れた際には、ある学生が、「以前はロシア人とも仲良く暮らしていたのに、なぜ対立するようになったのだろう。本当に悲しい」と話していた。

市民にとっては、きつと気付かない間に戦争への道を進んでいて、いつの間にか巻き込まれてしまったという感覚なのだろう。しかし、いったん戦争が起きると、止めることは難しい。今、実際に戦争状態にある国でも、ほとんど

の人は平和を求めている、過激な主張を持つ一部の人が、自分たちの組織や集団の利益を錦の御旗に掲げ、扇動し、対立関係をあおっていることが多い。私はそのことを、自分自身の「旅」から学んだ。

私は、自分が知りたかったり疑問に感じたりしたことについては、なるべく現地へ足を運び、そこで暮らす人たちから直接話を聞くことを心掛けていた。メディアもさまざまな情報を発信しているが、それらが本当に正しいかどうか常に疑いを持ちながら、自分自身で判断することが大切だと考えているからだ。

今の世界は、ネットワーキ化とグローバル化が急速に進んでいる。もはや一国だけで生きていく

ことは難しく、他国との共存の中でこそ、より良い発展が可能になる。今や世界の海外旅行者は年間11億人を超え、観光、ビジネス、留学などさまざまな目的を持った人が地球上を行き交う時代だ。一方、日本について見てみると、訪日外国人の数はここ数年、急激に増えているものの、出国者数はほぼ横ばいで、グローバル化の流れに逆行しているように思われる。

これは、日本人の内向き志向と何か関係があるのだろうか。世界が大きく動いている今、相手の立場を理解して共存・共生していこうという価値観が必要だ。世界を旅すれば、異文化の中でさまざまな価値観に触れ、日本との違いを感じるができる。それ

まずは、それぞれが歴史的な事実を認め、同じことを繰り返さないように努めることが大切ではないだろうか。自分たちの組織のみにとつて都合のいい解釈をしている限り、民族を超えた融和は実現しない。日本も今、近隣諸国との関係で緊張感が高まっている。互いの国益を優先した政策が、結果として国民に不利益を与えることになってはならない。対立関係を



デモ抗議による激しい暴動が起きたウクライナ・キエフの独立広場。昨年訪れた際にも、テントやバリケードが残されていた



トルコ・アクチャカレのシリア人難民キャンプ。シリアとの国境付近にあり約3万人が生活している

と同時に、人間としての「共通項」も数多く発見することができただろう。この世に生まれ、家族をつくり、子どもをつくり、次世代に継承していく。個人、家族、社会の間にはさまざまなことが起こるが、人間としての営みはこの国でも同じであり、それを見つけないが旅するのは面白い。

私自身、若いころに約10カ月かけて世界一周の旅をした。ローカルバスを乗り継ぎながら国々を回り、その国や地域のありのままの姿を目の当たりにした体験が、旅行業界に入るきっかけともなった。自分の目で見て、考えることに、勝るものはない。そう感じて、開発途上国にも数多く足を運んできた。

印象に残っているのは、ユーゴスラビア紛争の跡地だ。セルビア、コソボ、ボスニア・ヘルツェゴビナを訪れ、それぞれの国に暮らす人たちに話を聞いた。メディアの情報から受け取ってきたイメージとは異なり、互いに加害者でもあり被害者でもあると感じた。それでも、被害者意識ほどの国も強い。虐殺の事実は、どんな理由を付けなくても納得できないものだ。

私は今、これまでの経験を生かして、途上国へのスタディーツアーの普及にも力を入れている。そこから世界への関心が広がり、国際関係の仕事に就いた参加者もいるのは、非常にうれしい。一方的な情報だけをうのみにして思考を止めるのではなく、ぜひ、いろいろな世界を見て、体感して、自分なりの「旅」の魅力を見つけてほしい。



セルビアでは、コンボ紛争時にコンボから逃げてきたセルビア夫婦に出会った。セルビア政府は住居を提供するなどの支援を行っている



ボスニア・ヘルツェゴビナのスレブレニツァ虐殺記念碑。セルビア軍に虐殺されたボスニャック人8372人の名前が刻まれている

<Profile>

なめかた・かずまさ
1978年に陸路での世界一周の旅を経験。85年に株式会社エイチ・アイ・エスに入社。現在は取締役相談役CSR推進管掌を務める。ボランティア・スタディーツアーとエコツーリズムの普及、若者の人材育成にも力を入れている。